

監修者のことば

「医師は医師にしか育てられない」

読者のみなさんが、そう感じたのはいつ頃でしょうか…？ 現場に立ってすぐにその実感が湧いてきませんでしたか…？ 私の場合、「教科書を読んでいるだけではよい医師になれない」と最初の数週間ですぐ気がつきました。研修生活の中でも、自分は先輩医師から育てられていると日々、感じていました。

医療という営みが生身の人間を相手にする以上、臨床現場でしか体得できない臨床スキルがあります。その量は膨大で、五感を総動員して先輩たちから直接学ぶことしかできません。診察時の先輩の細かい仕草、目線のやりどころ、話し方、声のトーンなどを観察し、患者に対してこれらを自分なりの方法で試行錯誤します。自分のやり方を客観的に観察してもらってフィードバックをもらうことも大切です。診察方法に始まり、緊急時に必要な自己のマインドコントロールや医師を続けるモチベーション維持の方法まで、幅広いスキルを現場で体得しなければなりません。

おそらく、世界中の医師が「医師は医師にしか育てられない」という実感を持ち、後進を教える責任を自然に感じていると思います。そうして、ほぼすべての医師が、医学部卒業後5年もすれば後進の指導を行うことになり、後輩の指導はやがて日常業務の一部となり、教えることを特に意識しなくなるでしょう。でも、そこでちょっと立ち止まって振り返ってみてほしいのです。

「そもそも自分に教育スキルってあったっけ？」と、

教育の専門家としての訓練と経験を積んでいない医師が「自分は医学教育者の役割を果たしている」と胸を張ってもよいのでしょうか…？

本書を手にとったあなたは、この臨床スキル指導について何らかの問題意識がある、もしくは興味がある方だと思います。「自分が教わったやり方で後輩を教え続けてよいのか？」「自分のやり方で、ポイントは余さず伝授されているか？」「もっと効率のよい最新の医学教育法はないか？」こうした漠然とした不安や不透明感をもっているのではないのでしょうか。

読者にとって、本書は一筋の光を投げかける灯台の役目だけでなく、今後の航海に必要な海図の役目も果たすでしょう。『あめいろぐ医学教育』は、アメリカの医学教育をその歴史から最新のトレンドまで幅広くカバーし、さらに医学教育研究分野の最新の枠組みをわかりやすく提示しています。

前述の通り、臨床に必要な技術は現場でしか体得できないため、伝統的な師弟関係に基づく教授法から脱却することは困難です。しかしその一方で、医学という果てしなく広がる学術分野で必要とされる技術の複雑さと知識量は、医学部が形づくられた頃には誰も想定できなかったレベルに到達しようとしています。そして、従来の医学教育法では、社会が求めるスキルをもつ次世代の医師を養成することは不可能になりつつあります。そこで今、医学教育そのものが新しい研究分野として注目されています。

本書の著者らは、身をもってアメリカの医学教育を体験しただけでなく、自らの専門領域として医学教育トレーニングを修めています。つまり、循環器内科医が心臓疾患の専門家であると同様、医学教育を専門とする医師養成の専門家です。

「医師は医師にしか育てられない」。このことが変わることはありませんが、医師を育てるには**医師養成の専門医**が必要な時代に突入しています。本書は、ライフワークとしてこの問題に正面から取り組む筆者らが、それぞれの思いを込めて書き上げました。読み進めるにつれて、これまで読者がぼんやりと疑問に思っていたことの輪郭がはっきりし、さらに筆者たちの医学教育の専門家としての矜持を感じていただけると確信しています。

2022年3月吉日

シリーズ監修 浅井 章博